

「地域づくり」セミナー開催報告

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 佐野 直子

と出張所駐在員の二者の視点でお話させていただいた。

◇木祖村の魅力

木祖村を含む木曾地域は二〇一六年四月二五日に「木曾路はすべて山の中、山を守り山に生きる」のストーリーにて、三八の構成文化財のもと「日本遺産」に認定された（木祖村に關係する構成文化財は、木祖村単独の四件、木曾地域全体での二件ある）。

さらに、木祖村には水にまつわる百選に選ばれた名所が三つある。いずれも「木曾川の源流」という清らかな水の作り出す風景美や希少性が評価され、多くの人々を魅了するものとして評価されている。そうした認定を受けたものももちろん、その他にも多くの魅力がある。しかし、そのことに地域の人々が十分に気付いていないケースも多くある。例えば、名古屋近辺で四月に咲く桜。木祖村では開花時期がGWになる。「時期がずれる」「山間の奥ゆかしい桜や紅葉」：そうした部分は魅力の一つになり得るだろう。

そこで、地域おこし協力隊では「GWに愛でる桜便り」、「ひと足早い紅葉便り」を発行するとともに、それぞれのフォトコンテスト

二〇一六年度、人間文化研究科

の「地域づくり」ユニットは立ち上げから二年目となった。教員スタッフは従来からの佐野直子、浜本篤史、市川哲に、榎木美樹（NGO論・NPO論）が新たに加わり四名体制となった。同時に、六名の大学院生を迎えた。

ユニット活動の軸の一つである「地域づくり」セミナーは、今年度二回開催したのでその概要をここに収録する。ウェブサイトを<http://www.region-nctuhum.com>）にも参加印象記などを掲載しているのであわせてご覧いただきたい。

第四回（二〇一六年六月十八日）
名古屋と木曾川
上下流連携を考える

サクラサイドテラス
参加者約三五名

井手英秋

「木祖村の魅力と下流域との関係・地域おこし協力隊活動を通じての発見」

山登由紀子

「木祖村による上下流交流のこれまでとこれから」

岡本隆子

「産廃問題後の御嵩町・亜炭・リニア残土問題を中心として」

岡本秀範

「御嵩町と木曾川流域圏」

第五回（二〇一六年十二月十日）

地域のことばと地域活性化

「名古屋ことば」は嫌われているのか？

秋葉神社集会所

参加者約二五名

池原稔

「文化の商品化：沖縄のしまくとぅばの事例」

鈴木隆三

「名古屋ことば考察：名古屋の人は、達観している」

▼第四回

「地域づくり」セミナー

「源流の里」木祖村の魅力と課題

木祖村名古屋出張所駐在員

山登由紀子

木祖村地域おこし協力隊

井手英秋

木曾川の最上流、「源流の里」

木祖村は長野県木曾地域の最北部に位置している。

人口三〇〇〇人にも満たないこの小さな村が、なぜ名古屋市内に出張所とアンテナショップを持ち、「上下流交流・連携」に取り組んでいるのか。その背景と交流活動の問題・課題を地域おこし協力隊

の問題・課題を地域おこし協力隊

を開催し、村内外に魅力をPRした。今後も特に村の人が気付かない魅力を発掘・PRしていきながら新たな魅力が生まれるようなイベントを企画していきたい。

◇下流域との関係

「源流の里・木祖村」、このフリーズは観光客を引き付けるだけではなく、この点を強く中京圏にアピールすることこそ、小さな村が生き残っていく道だというのが木祖村の考えである。

高度経済成長期以降の中京圏での水不足問題を受け、木曾川の総合的開発の一環として「味噌川ダム」の建設が開始された。しかし水没地域のない味噌川ダムは「水特法」の適用外であり、行政上の優遇措置が受けられないとされてしまった。これを受けて、当時の木祖村長をはじめとする木祖村の人々が訴えたのは、上・中・下流すべてが（実質的な水としても、経済的にも）潤い、その潤いが水源の森にも還元されるべきだということであった。

また平成に入り、二一世紀のダムに求められる役割として「水源地域ビジョン」の策定も求められ、木祖村は自立的・持続的な活性化、流域のバランスのとれた発展を目

的とする「木曾川源流の里ビジョン」を策定。味噌川ダム建設当時からの上流交流・連携の土台の上にはさらなる目的が上乗せされ、上下流交流推進は村の重要な事業の一つにもなっていた。

こうしたなか、木曾川流域（特に下流域）の自治体等のイベントに出向く機会も多くなり、水源林保全等に賛同してくださる企業・NPO団体等とお付き合いも増え、木祖村PR・村内経済の活性化等も目的として出張所やアンテナショップの開設にも至ったのであった。

◇村の受け入れ態勢

しかし現在、「交流が広がれば広がるほど、受け入れが難しくなる」という問題が浮上している。下流域の方々による村内の環境整備活動、自然体験イベント、既存の村内イベント、また前述の新たな魅力創出イベント……数えきれないほど多数のイベントを、実は村の一部の関係者が右往左往しながら対応しているところである。

現場側から見れば、特に夏は今の以上の受け入れは難しい一方で、下流側の出張所には夏の活動要望が多く寄せられる。通年を通じた魅力創出、PR、新たな形での交

流活動を考える必要があるだろう。

さらには「村民の意識」も問題点に挙げられるだろう。一部の関係者以外は「村民であっても上下流交流を知らない」どころか、「木曾川の水がどこに流れているか意識をしていない」人がほとんどではないだろうか。そして、上下流交流も「ただ観光客が来ている」程度の見解である方も少なくないと思われる。そのため、普段の生活をしている村民と、上下流交流という意識を持って来村する人々との思いの差が生じてしまう場面も見受けられる。

他方で、木祖村では村民による自主的な河川の清掃活動が行われている。「下流域の人々の為に」という意識は希薄であったとしても、「川をきれいに使うことは当たり前」という意識は非常に高いようにも感じられる。これはある意味で「PRはしないが、無意識になされる上下流交流」ともいえるのではないだろうか。

いずれにしても、「木曾川の上流交流」はまだ発展途上であり、解決していくべき課題も多々ある。既存の枠組みにとらわれない柔軟な発想を流域全体の皆さんからいただきながら、積極的な動きを取ることができればと考えている。

御嵩と木曾川流域圏

―産廃計画とその後の問題
(亜炭・リニア残土)―

元御嵩町環境審議会会長 岡本秀範
御嵩町議会議員 岡本隆子

◇産廃計画と木曾川

岐阜県御嵩町は、名古屋市の北東、約四〇キロメートルに位置する人口約一・八万の町であるが、その北部の木曾川沿岸の丸山ダム直下に計画総面積三九・七ヘクタール（将来計画二〇〇ヘクタールとされた）の大規模な管理型最終処分場等の建設が計画された（写真は一九九七年のタイム誌六月一六日号に掲載された建設予定地）。

一九九一年の計画表面化以降、町民は反対運動を行ない、九七年には住民投票で圧倒的多数により反対の意思を表明した。その後さまざまな曲折を経て業者（寿和工業）・町・県の三者が計画中止の合意に達し、二〇一〇年に業者は許可申請を取り下げるに至った。この問題点が多い計画の、とりわけ最大の問題は、産廃処分場からの排水が直下の木曾川に放流

されるが、その排水口から三キロ下流には愛知用水取水口、さらに下れば犬山頭首工、朝日取水口などがあり、名古屋市等の下流域約五〇〇万人市民の飲料水水源となっていることであった。このことから、運動を主導した、若い母親を中心とする「みたけ産廃を考える会」は下流域市民に問題の重要性を訴えるなど、独自の活動を町内外に展開した。



◇新たな町づくりへ

九五年に当選した柳川喜郎町長（当時）は、県に対し計画に関する膨大な「疑問と懸念」を提出したが、当初より木曾川水源の汚染の可能性を的確に指摘していた。計画の凍結政策を続ける過程で九六年に暴漢に襲撃され瀕死の重傷を負いながら、住民投票後は計画中止の実現に向けて三者の合意形成に努める一方で、環境基本条例・希少野生生物保護条例の制定、環境審議会の設置、町環境基本計

画の策定、町レッドデータブックの制作などの諸施策を進めた。

このことは、法的拘束性がないとされる住民投票結果の実質化策を、①計画中止の実現、②町施策としての内実化の両面で柳川が達成しようとしたものと考えられることができる。後者についていえば、産廃問題を契機に高揚した住民たちの環境保護への意識と活動、および、町としては未曾有の規模の、創発的ともいえる反対運動を、住民パワーによる環境の町づくりとして再編成しようとしたことになる。実際、上述の環境施策も、ほぼ全てが公募の住民参加によって進められた。また、環境基本条例には広域的連携が謳われるなど、施策の基本に木曾川を媒介とした下流域市民との連携協力の経験が生かされることとなった。

このように木曾川の水を一滴も飲まない御嵩町民が苦闘の末「勝ちとった」産廃計画中止は、御嵩が環境の町として再生する契機として生かされていく。柳川は、その環境の町への基盤づくりを行ない、町の基本的なビジョンを具体化した。

◇現下の問題

—— 亜炭廃坑とリニア建設残土

二〇一三年に御嵩町は国の環境モデル都市に指定されたが、現在、環境の町としての成否を決定づけかねない新たな問題に直面している。第一は、亜炭鉱害だ。御嵩町では明治末期から一九六七年の閉山まで、亜炭の採掘が行われた。採掘跡地は六七・四ヘクタールあり、その廃坑が原因で浅所陥没が毎年十数件、ここ数年は大規模な落盤が発生している。戦中・戦後の可児（実質的に御嵩）亜炭生産量は、ピーク時に年間七五・八〇万トンで全国一、炭鉱数は最多時に一五八にも上った。これらは、東海地方を主とする繊維、陶磁器、食品などの産業を重要なエネルギー源として支えた。この亜炭廃坑充填に、目下、経産省防災三カ年モデル総事業費四四億円が投入されているが、これは全廃坑充填の一パーセント規模に過ぎず、この後の対策は一町で到底賄えず、先は見通せない。リニア建設残土等による安直な充填策が唱えられる危うい状況だ。

第二に、リニア新幹線とその建設残土に関して述べたい。リニア新幹線は御嵩町を約四キロメートル通過するが、この部分を含む岐阜県東濃地区には日本有数のウラン鉱床が存在している。かつては

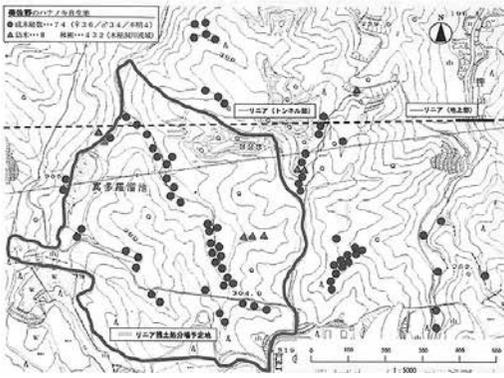
動力炉核燃料開発事業団が採鉱を行っていた。ウラン鉱床は回避するとされているが、このルート上で平常の三倍以上の放射線値（〇・三四一マイクロシーベルト毎時）の測定報告がなされている（樫田秀樹「岐阜県東濃地区で『ウラン残土』の可能性リニア中央新幹線ルート上で高い放射線値を測定！」『週刊金曜日』一一〇一、二〇一六年三月二五日）。リニア建設をめぐっては、この排出される①建設残土②ウラン残土の放射性物質ラドン放出等の危険、②建設残土に含まれる硫化鉱物の生成する硫酸がカドミウム、鉛、亜鉛などの重金属を溶出し土壌および水系を汚染する危険、また、③残土処分場（埋め立て）候補地（以下、予定地）の希少種を含む生態系の破壊、が強く懸念されている。

◇水系汚染とハナノキ湿地林

土壌と水系の汚染に関しては、以前に隣接の可児市で東海環状自動車道の工事発生残土による久々利川流域の重金属汚染事件が起きているが、これは犬山から可児、御嵩にかけて美濃帯という硫化鉱物を含む地層分布があることによる。当地区の掘り起しがなされれば同様の水質汚染を誘発する

危険がある。御嵩町美佐野の処分予定地には押山川などの小河川が流れるが、これらは可児川に注ぎ、本流の木曾川入るので、町内だけでなく下流域への影響も懸念される。

他方、この予定地のある美佐野地区には、町内最大のハナノキ（絶滅危惧Ⅱ類）の群生地があり、成木と稚樹、計五一四本が町民による詳細な調査で確認されている（籠橋まゆみ編『御嵩町のハナノキ自生地 毎木調査記録』御嵩町《ハナノキ調査グループ》二〇一五年）。町希少野生生物保護条例の上からも、この一大湿地林の保護は急がれこそすれ、建設残土による埋め立てなどはありません。



ないものだ（図の囲みがリニア残土処分予定地、ドットはハナノキの成木）。

◇流域・交流

以上のように御嵩は木曾川流域にあって、かつては中山道の宿場と里山が融合する町だったが、現在は、亜炭、ウラン鉱床、産廃など、この地の地質学および地理的・地形的な特性を利用しようとする人間活動によって、自然と生活環境が脅かされる環境最前線の町となっている。この大きな矛盾の解決には木曾川中流域だからこそ、下流域都市部との緊密な持続的交流を生み出す起点となること、その端緒を開くだろう。

▼第五回

「地域づくり」セミナー

文化の商品化―沖縄のしまくとぅばの事例

株式会社クレスト

代表取締役 池原稔

◇しまくとぅばの普及・継承のために
沖縄県議会で「しまくとぅば条例」が二〇〇六年に全会一致で成立してから十年目になる。しまくとぅ

とぅばとは琉球諸語の総称である。

この条例ができて十年間、沖縄県はしまくとぅばの普及・継承に勤めてきたが中々進まなかった。四年前からは、毎年九月一八日にしまくとぅば復興県民大会が開かれ、県民のしまくとぅばに対する親近感はアップしたが、普及・継承には程遠いのが実情である。

弊社が「沖縄しまくとぅば放送局」というしまくとぅばと島唄のラジオ局の開局準備を始めたのが第一回目の県民大会の直後、二〇一三年十月で、二〇一四年五月に開局にこぎつけた。今ではこのほかにも、幅広くしまくとぅば関連の活動を会社の事業を展開している。

これらの事業を通して感じたことは、言葉は講習会とか勉強会だけでは普及は難しいのではないかとこのことである。沖縄県でもこれまで県の補助事業としてしまくとぅばの講習会、勉強会、発表会などが開かれてきたが、普及という観点から見ると、限定された特定の人達のレベルで止まって一般大衆まで落ちてこないのが現状である。大衆文化にするためには、講習会などの一時的な講座、イベントではなく、日常の生活の中で常に、一般大衆と接する仕組みが

必要なのではないか。こういう過程の中から、文化を商品化してその商品を一般大衆の生活の中に流していくという弊社の事業の形が出来上がってきた。

◇沖縄しまくとぅば放送局

弊社のしまくとぅば事業の一つ目が「沖縄しまくとぅば放送局」である。これはネットラジオで、サーバーを弊社の嘉手納町本社に置いて二四時間三六五日、インターネット上に配信している。全ての番組はもちろん、コマージャーや時報も含めて全てしまくとぅばである。楽曲は全て沖縄民謡（島唄）で、歌詞は全てしまくとぅばになっている。

「沖縄しまくとぅば放送局」は、一日に一二番組を午前、午後の同じ時刻に二四時間放送している。午前二時と午後二時は同じ番組が放送され、世界のウチナーンチュが世界のどの地域でも全ての番組が聞ける仕組みである。番組は、週八四の枠があるが、現在放送している番組が一一番組あるので、七〇番組が毎週一回、残り四一番組が二週間に一回の頻度で放送している。

番組の担当者で最も多いのが沖縄本島二六市町村全ての老人会で、

それぞれのしまくとうばで番組を担当している。離島については、七つの離島郷友会が出演しており、国際交流団体は三団体、沖縄ハワイ協会、沖縄ブラジル協会、沖縄アルゼンチン友好協会も番組を担当している。その外には、伝統芸能、伝統工芸、伝統行事、沖縄文化のほぼ全ての関係者が、自分達の関連する分野の番組で進行役をやったり、出演したりしている。

一時間番組の外に、毎週一回三分間コーナーという形で、曜日と時刻が決まったコーナーが解説されている。現在、国会・県会議員、市町村長、教育長、各種団体会長、老人会や婦人会の会長、郷友会会長、沖縄県の芸能、工芸、文化関連団体の代表者、道の駅など、一五四の個人・団体・企業の方々が、決まった日時に各自のコーナーを持って、それぞれメッセージを発信している。

「沖縄しまくとうば放送局」はネットラジオだが、県内二七施設に沖縄しまくとうば放送局ネット専用ラジオを置いて、できるだけ多くの方々に聞いてもらえるような仕組みを作っている。屋外では防水、あるいは盗難の関係上、はだかでラジオはおけないので、飲料の自動販売機にネット専用ラジ

オを内蔵して、街角で二四時間しまくとうばを流している。地元市町村の防災無線が作動したときは、自治体からの防災行政無線放送に切り替わる仕組みである。ファミリーズ市場など野菜を扱うところにしまくとうばラジオを設置する場合、野菜名をしまくとうばのほか、四言語で表記したプレートも設置させて頂いている。

沖縄のしまくとうばはユネスコから消滅危機言語に指定されているが、私は、どんな小さくても、いつでもしまくとうばが流れている空間があれば消滅しないのではないかとの思いで、そういう空間を増やしていきたいと思っている。

◇多様なしまくとうば事業

ほかにも、弊社が運営している二四時間放送のコミュニティFM放送局FMニライでは、しまくとうば番組を週五二時間放送している。

さらに、弊社ではしまくとうば事業として、①二〇一五年六月にプロのしまくとうば漫談師を育成する目的で開校した沖縄演芸学園、②日々の暮らしの笑いの中にしまくとうばを飛びかわしたいとの思いから、二〇一六年に第一回大会を開催した沖縄しまくとうば

漫談大会、③二〇名から四〇名の団体をしまくとうばでガイドが案内するしまくとうば観光バス、④さまざまな式典、お祝い、敬老会などにしまくとうばの司会者、漫談師、琉球舞踊、沖縄民謡、沖縄芝居、エイサーなどの沖縄芸能を派遣する「ていがねーさびら（二手伝しましよう）」という意）、そして、⑤インターネットで「しまくとうば（ここでは琉球諸語の中の沖縄語、八重山語、宮古語）」を教えるしまくとうばeラーニングなどを展開している。

◇しまくとうばの商品化とIT

これらの事業を通して感じることは、しまくとうばに対する地域の皆様の熱い思いである。自分達の親や先祖が使ってきた言葉を守り続けたいという思いがひしひしと感じられる。

それに比べると沖縄の企業は沖縄文化を企業イメージに取り込んでいる企業は多いが、しまくとうばの普及継承活動に関心の高い企業が少ない。沖縄の企業は、しまくとうばの普及継承活動がウチナンチュのアイデンティティの問題だけでなく、企業が最も関心を寄せる経済の問題でもあるということを認識すべきなのではない

か。

しまくとうばは沖縄文化の土台である。しまくとうばが消滅すれば沖縄文化も衰退してしまう。沖縄文化は沖縄観光の重要な要素である。沖縄文化の衰退は沖縄観光にとって大きなダメージであり、観光産業の沖縄経済への影響は大きい。観光業界のみならず、沖縄の企業は沖縄文化に育てられて大きくなってきた。企業は地元文化なしに発展することはありえない。

もう一つ、「沖縄しまくとうば放送局」を展開して感じたことは、沖縄のしまくとうばは、島々村々の数だけあり、多様性に富んでいるということである。「沖縄しまくとうば放送局」を聞くところから、しまくとうばは厳密には字ごとに違う。しまくとうばの多様性を守ることは大事なことである。

最後に、「沖縄しまくとうば放送局」が毎週内容の違う番組を放送できるのは、この事業がITの塊だからである。弊社はIT会社で、医療機関と介護施設のIT化をさせて頂いている。今の世の中、何かを普及させようとする場合はITなくしては考えられない。しまくとうばの普及もITを積極的に活用すべきであろう。

名古屋ことば考察―名古屋の人は、
達観している

株式会社オフィステラ 代表
曹洞宗千光寺 住職

鈴木隆三

今回、「沖縄の文化と名古屋の文化の違い」といった観点から、佐野直子准教授をコーディネーターとして本セミナーが開催された。沖縄に関しては池原稔氏、名古屋に関しては私が講師を務め、特に話し言葉(沖縄は「しまくとぅば」、名古屋は「名古屋弁」)を柱として、お互いの文化の成り立ちや現状、将来について語り合うという内容であった。

ここでは、私が名古屋に住んで約七〇年という人生経験や、これまで上梓した三冊の名古屋弁関係の本、『試験に出る名古屋弁会話集中講座』(サンマーク出版)『声に出して読んでやあ名古屋弁』『ええがね、名古屋』(以上すばる舎)『著者名…二代目勤勉亭親不孝』で紹介した内容などを基として組み立てた「名古屋の人は、達観している」というテーマについて、レポートしてみることにした。

◇なぜに名古屋は嫌われるのか？

さて、二〇一六年六月に名古屋市が日本の主要八都市に五年以上在住している老若男女を対象に「都市のブランドイメージ調査」なるものを実施した結果、名古屋は「日本で最も訪れたくない都市」のナンバーに輝いた。さらにその結果を受けて、中日新聞と名古屋市が地元住民を中心にその感想を問うアンケートを実施したところ、実に六割以上(中日新聞)及び八割以上(名古屋市)の人が「同意できる、仕方がないけど受け入れる」と答えたという(平成二八年一月一日、二二日の中日新聞朝刊の記事から)。

このことから、概ね「名古屋は全国的にみて嫌われている都市」なのだと言えるが、なぜそうなったのかを考察してみたい、というところから私の話はスタートした。その時にもお断りしたことだが、今回私がお話しした内容は事実をもとはしているが、そのほとんどがフィクションつまり創作である。しかし、私の長きにわたる人生経験からして、恐らくこの地方に長く住んでいる方や名古屋の人たちとの付き合いが長い方々なら、「そうかもしれない」と思っているだけのような内容になっていると確信している。

ということ、なぜ嫌われるかについては、「江戸時代に尾張藩士が徳川幕府の勘定方として全国各藩の財務担当との予算折衝に当たった」という仮説を打ち立てた(もちろん、そんな史実は多分というかほとんどないだろうが…)。つまり、各藩の財務担当に対してケチで計算高い尾張藩士は、「そんなとろくつせやあ予算は出せせんわ。一〇年早あーわ!(そんな望外な予算が通るはずないではありませんか。もっと真剣に一〇年ぐらい考え抜いてから予算折衝に臨んでください)」と名古屋弁でまくし立てたわけで、それが相手の財務担当藩士のトラウマとなり、やがて「尾張・名古屋」と聞いただけで体中に嫌悪感が走り、それがDNAとなって各藩の藩士の子孫たちに刷り込まれたとみられる。やがて「名古屋」と聞くと、「なんか嫌だな、行きたくないな、会いたくないし、顔も見たくない」と、全国の各藩士の多くの子孫たちが思うようになり、それが引き継がれて現在も名古屋が嫌われるルーツになったのではないかと、この結論を導き出すに至った。

◇堅実で、田舎で、大都会で、
意外に先進的

その後、「名古屋の堅実性」や「偉大なる田舎で、しかも大都会・名古屋」「ネガティブアプローチとブラウンコンプレックス」「実は進取の気鋭がある土地柄・名古屋」など、名古屋ならこそその意外な面も紹介しつつ、名古屋文化がいかにしてつぐられ、守られてきたか。名古屋の人たちが冒頭のアンケート結果をなぜ素直に受け入れられるのかなど、について、もちろんフィクション中心の内容ではあったが話しさせていだいた。

いずれにしても、名古屋の人たちは「達観して現状を受け入れていく」という現実論へと結びつけ、最後に「名古屋言葉の復活はあるのか」という課題については、名古屋独特の合理性を名古屋の食文化の中に反映させて、「名古屋弁でリーズナブル割引」(一定の名古屋弁がしゃべれたら、名古屋めしを割引特典がある)という企画を打ち出したら、というアイデアを披露してお開きとなった。

なお、今回お話しした内容は、近く一冊の本にまとめて出版する方向で検討している。もし、その機会が訪れた場合にはぜひ手に取ってご覧いただければ幸いです。と、この上ない。